主将選ぶ 一票 大人へ 一歩

選挙導入 自ら考える力育った

高校野球アップデート update 2

1930～60年代に春夏の甲子園に計17回出場している公立の古豪・小倉工（北九州市小倉北区）の監督、牧島健（33）は、今期の主将と副主将を初めて選挙で決めた。

成人年齢が18歳に引き下げられ、授業では「自分で考えて意思を表明しよう」という主権者教育に力を入れている。卒業後は就職する生徒が多い。牧島も部員たちに監督のサインに頼らず自分で考える姿勢を求めてきた。

牧島には、1年時から点呼などでリーダーシップを発揮してきた部員を主将にする腹案があった。

だが、前主将に聞くと別の部員の名前が挙がった。

「あいつしかいません。みんな言っている」

例年は一致する意見が食い違った。それなら、成人間近の部員たちの意見を反映させていいのではないか。迷いもあったが、主将選挙をすることに決めた。

昨年の夏休み、教室に部員と監督、部長計46人が集まった。黒板には当時2年生の6人の氏名が大書された。主将選挙への立候補を届け出た部員だ。

立会演説会や投開票の運営は、マネジャーの西村伊桜和（当時2年）が担った。候補者は持ち時間2分で意気込みを演説し、部員らが菓子缶に1票を投じた。漢字を誤ったり、ひらがなで書いたりした票は無効にした。

開票の結果、過半数の25票で当選したのは島田楓己（同）。前主将が名を挙げた選手だった。

昨夏の福岡大会で島田は代打で出場したが凡打に倒れた。チームも4回戦で敗退。悔しさを晴らしたいと願っていた。

「絶対甲子園に行くという目標を忘れず、必要な練習を積み重ねて引っ張っていく」

演説でそんな思いをぶつけた。

島田はとにかくストイックだ。朝6時半には打撃練習を始め、車で出勤してきた牧島にあいさつするのが常だ。帰宅後は体力の回復を優先し、携帯電話もあまり見ない。新型コロナウイルスの影響で全体練習ができなかった時も、近所のバッティングセンターに日参していた。

島田は主将として「弱いところは見せられない。嫌われることも気にせず、自分が何事も一番になって指示や練習をしてきた」と話す。打撃や走塁など、勝つために足りないことを明確に示し、部員たちにも自分を追い込むことを求めた。

部員たちもこたえた。

1学年下の西村仁太は絶好球を見逃すミスが続き、今春から島田と一緒に朝練や夜の自主練習をする。

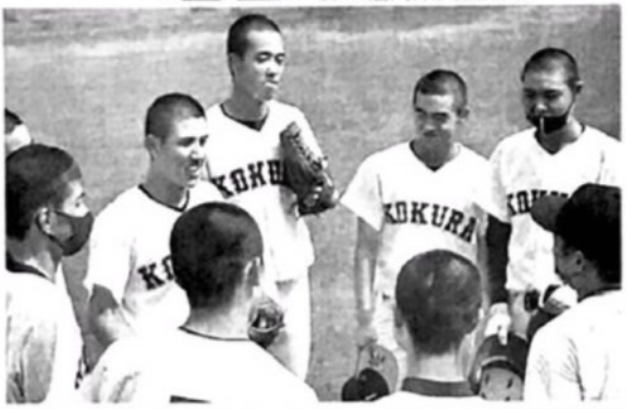
「いつも気を張っていて、抜く時はないんですか」と聞くと、島田は「自分が抜いたらチームが抜ける」と答えたという。西村は「バッティングも良くなったし、練習がきついときでも頑張らなくちゃいけない、と意識が変わった」と話す。

小倉工は、春の福岡県大会で準優勝。今月3日に開幕した福岡大会では、6日の初戦を4番打者の島田が2打点を挙げるなどしてコールド勝ち。20日の5回戦は、安打で出塁した島田が生還してサヨナラ勝ち。3年ぶり8強入りを決めた。

島田らしく鍛え上げられたチーム。牧島の腹案にあった選手も、外野手や代打として勝利に貢献している。牧島は「選挙権を持つ前から『ミニ社会』で選挙を経験したことで、投票する側は選ぶ責任を感じ、選ばれた側も責任をもってその役に取り組んでくれた」。教え子たちが大人へと前進した手応えを感じている。

＝敬称略

（上月英興）



㊤主将に「当選」が決まり、記念撮影した小倉工の島田楓己＝牧島健監督提供

㊦福岡大会の5回戦で、牧島（右端）の話を聞く島田（左から2人目）ら＝20日、福岡県久留米市